

「木」への思いを通して 「家族」への思いやりが育まれる

木に対する職人の愛情が心に響いてくる



ドイツ東部、チェコとの国境近くのエルツ地方。クリスマスと木工細工で知られる小さな町ザイフェンがある。この町のおもちゃ博物館館長のアウエルバッハさんが人懐こい顔で話してくれる。

「この辺りは、アカシカやイノシシ

などが住む“豊かな森”に囲まれています。そして、人々は小さい頃から木に触れ、木工職人の仕事を見て育ちます。私たちにとって、森や木が生活の中にあることは特別なことではないのです。ほら、この机を触ってごらんさい、木は安全で、子供だけでなく大人にも心



温まるとても身近な素材なのです」

館内には、クルミ割り人形やクリスマスピラミッドなどの木工芸品が並んでいる。木に対する職人の愛情が刻まれているのだろうか、人形の表情や細かな装飾の一つ一つから心に響くものを

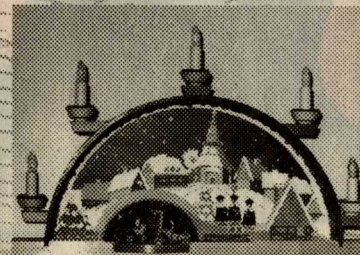


感じる。

「このクリスマスキ

ヤンドル、アーチ型になっているでしょう。この辺りは昔、鉱山町だったのです。アーチは鉱山の入り口、キャンドルはそこに吊しておいたろうそくをモチーフにしています。つまり、朝から晩まで暗い鉱山の中で働いていた男たちが帰ってきたときに、玄関や窓を明るく照らしてあげたいという気持ちから生まれたものなのです」

確かにクリスマスは光に満ちている。光は、家族への思いやりの象徴なのだろう。



クリスマスがもう一度家族の絆を結んでくれる



「この工房は祖父の時代から始まり、来年でちょうど100年目を迎えます。私にとって後を継ぐということは、家族のメンバーに加わるということなのです」

クリスマスピラミッドの部品が並ぶ。色付けをす



る人、人形に顔をいれる人、組み立てる人がいる。ここは、町中にあるミュラーさんの工房。職人たちの手で、伝統の木工芸品が作り出されていく。

「もうすぐクリスマス。イヴの日には400km離れて住んでいる兄弟も必ず家に帰ってきます。この日は、もう一度家族を結んでくれる特別な日なのです」